

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.8 生田緑地ばら苑

生田緑地ばら苑（神奈川県川崎市）は、筆者が「セメント彫刻が映える三大バラ園」と勝手に考えているバラ園（神代植物公園バラ園、谷津バラ園）の一つである。今回は生田緑地ばら苑を訪問するために向ヶ丘遊園駅（小田急線）で下車、そこから徒歩で鬱蒼とした多摩丘陵の雑木林を登りきると、眼下に華麗なばら苑がふいに姿を現した。筆者が訪問した2023年11月2日の関東甲信地方は、高気圧に覆われて晴れわたった。各地で気温が25度以上となり、11月としては観測史上最高温度を記録、半袖でも過ごしやすい天気であった。しかし肝心のバラは四分咲きで、香り立つ秋のバラを鑑賞するには、やや物足りなかった。同苑は、春には約800種3,300株、秋には約625種2,900株のバラが咲き誇るといふ。ただし筆者の訪問の目的は、第一義的にはセメント彫刻の鑑賞にあった。

木陰に立つこの少女の立像は（写真1）、季節外れの真夏日のなかでことに涼しげであった。少女は両手で胸の前に花束を持ち、両足をやや広げている。少女の足元の最下部に刻まれた「G. HAYAKAWA」のサインから判断するに、作品の作者は早川巍一郎（1905 - 1978）だろう。早川は大正から昭和にかけて活躍した彫刻家で、小野田セメント株式会社が協賛した野外彫刻展に何度か出品している。また、多摩美術大学教授として後進の育成に取り組んだことでも知られている。

太平洋セメント株式会社には、同苑に設置された彫像を撮影した紙焼写真が残されている。撮影時期は1960年代であろう。このことから推察して、苑内に設置された彫像は、小野田セメント株式会社が同苑に寄贈したのかもしれない。訪問時には苑内で6体の白色の彫像が確認できたが、小野田セメント株式会社と関係がありそうなものは4体であった。そのうちの少なくとも2体は早川作品で、残る2体も早川による作品の可能性が高い。いずれも正式な作品名称は不詳で、本稿では便宜的に「作品1」「作品2」と称する。

生田緑地ばら苑は、1958（昭和33）年に開園。1927（昭和2）年にオープンした向ヶ丘遊園の開業30周年記念事業として造営され、同苑はバラの品種の多いことで「東洋一」と謳われたという。掲載写真では、水鳥と遊ぶ童子がピンクのバラに囲まれている（写真2）。水鳥と一糸まとわぬ童子という水辺を想起させるモチーフが気になったので調べてみると、実は本作はかつて苑内に存在した池のなかに設置されていたことが判明した。この池は現存せず、かつての所在地は花壇となり、池があったころの面影は残されていない。

小野田セメント株式会社が協賛した野外彫刻展を鑑賞した美術評論家の一人は、「セメント彫塑の、野外展を開催することによって彫塑がガーデンファニチュアとしてばかりでなくひろく街頭の、そして社会の芸術として人々の生活を豊かに潤いあるものにしてゆくことは有難い」と評し、セメント彫刻が公園に彩りを添える装飾品であるとの認識を示してい

る。「ガーデンファニチュア」(garden furniture)とは、庭園に設置される屋外用の装飾物を指す。ばら苑に置かれるセメント彫刻は、自然物であるバラを引き立たせ、逆に色とりどりのバラは白色のセメント彫刻を視覚的に演出する。この視覚的効果は作者である彫刻家自身も自認していたらしく、作品のモチーフが花であることが多い。バラ園のセメント彫刻は、有機物と無機物が互いに彩りを加え合う競作といえよう。

最後にばら苑が閉鎖の危機にあった歴史も付記したい。2002(平成14)年3月31日の小田急向ヶ丘遊園の閉園に伴いばら苑も閉鎖の危機を迎えたが、存続を求める多くの市民の声に応え、同年中に同園を川崎市が引き継いだ。



写真1 早川巍一郎の作品1



写真2 早川巍一郎の作品2